分配行動の発達的研究 (1)

——分配におよぼす年齢差の効果を中心に——[1)]

広田君美・多喜弘次

1 はじめに

1970年以後の社会心理学的研究の一つの焦点は，社会的支援行動 (prosocial behavior) に移ってきたといってよい。かつては攻撃や競争などの反社会的行動やネガティブな行動の分析が中心であったが，むしろ積極的に他人を援助し，協力しあうといったポジティブな社会的行動がいかなる場合にどのように現われるかを中心とした研究に変わってきたのである。人はなぜ他人を助けるのであろうか。極端な場合にはなぜ自己を犠牲にして他人のために奉仕するような行動をとるのであろうか。あるいは何かを他人と分けあう場合，なぜ自分は少なくとって相手により多くを与えようとするのであろうか。このような行動を社会的支援行動の中心をなす愛他的行動 (altruistic behavior) とよぶが，この愛他的行動には大きくわけてつぎの3つが区別される。第1は，他者との分配が自己に有利におこなわれるか，それとも相手により多くを与えるか，または平等に分けるかといったいわゆる分配行動 (sharing behavior)。第2には，困っている人，援助を必要としている人に進んで手をかし援助を与えようとする援助行動 (helping behavior)。第3には，自分の所有物をどれほど他人に与えようとするか，たとえば，児童が自分のもっているケーキやキャンディをどれほど積極的に仲間に分け与えるであろうか，あるいは街頭の物乞いにどれほど進んで喜捨するであろうかといったいわゆる贈与行動 (donating behavior) の3つである。

本研究はわれわれ関西大学社会心理学研究室で進められている prosocial behavior の一連の研究の1つであるが，ここでは特に分配行動を研究の対象としてとりあげ，分配を規定するさまざまな変数についての検討をおこなおうとするものである。分配行動には，自分に有利な配分 (selfish 分配)，相手と等しい分けかた (equal 分配)，相手により多くを与える (generous 分配) の3つの配分方法があるが，この3つのタイプの分配がどんな場合に現われてくるかを規定する要因には，配分者の個体的要因，配分・被配分者間の関係的要因，状況的要因，さらには配分対象の魅力の条件などさまざまな要因があろう。

---

1) なお，この研究に関連した分配行動と愛他性の実験的研究については，多喜ら (1978, 1979 a, 1979 b) において発表された。

われわれの本論文の研究目的は児童の分配行動が年齢とともにどのように変わっていくかの発達的研究なのであるが，その実証的研究に入るにさきだって分配を中心とした愛他的行動についての従来の研究を大まかにふりかえってみることにより，分配行動を規定するどのような変数が明らかにされているかを考察することから始めよう。

2-1　分配の公正さに関する諸研究

Piaget, J. (1930) によれば，児童の道徳的判断は主として2つの段階を経て発達するという。他者の立場に立って行為や状況を意味づけることのできない最初の自己中心的な段階では，児童は自分の行為に対するルールを一方的に課せられた義務とみなし，あくまで改変修正できないものと考えやすい。しかし，児童は年齢とともに自己の行為を他者の立場から認知し評価しうるようになってくる。この段階ではルールに絶対的に服従するのではなく，自分自身もルールをつくりあげている一員であることを知り，その時の相手や状況に適した方法でふるまってよいと考えるようになる。すなわち，児童は他律的な道徳観から自律的な道徳観へと変わっていくといえる。

また，Piaget は道徳的判断の発達が分配の公正さ (distributive justice) の判断に密接に対応しているという。たとえば，2人の児童に10本の鉛筆が分配のために与えられたとき，彼らはどのように分けあうのが公正だと判断するだろうか。Piaget によれば，7・8歳までの児童にとっての公正さとはさきに述べたように他律的に判断され，大人が公正と決めた分けかたに追従しやすい。しかし，7・8歳から10歳にかけては，分配は絶対的に等しくおこなわれるべきだとするいわゆる絶対的平等主義 (equal justice) が顕著になる。ついで11歳頃からは相互性 (mutuality) や相対主義 (relativism) への関心が強くなり，規則は必ずしもすべての人に同一に適用されるべきではなく，各人の特殊な事情を考慮すべきであるという人や状況に対応した相対的な平等主義にもとづいて分配結果の適切さを判断するようになる。したがって，児童の分配公正判断は自己中心的で他律的な公正観から，絶対的な平等性 (equality) を重んじる段階へと進み，最終的には相対的平等性 (equity) の重視へと発達するというのである。

この他，児童の道徳的判断の発達についての研究はいくつもある (たとえば Kohlberg, L. 1969 など)。そのいずれも Piaget と同様に，児童の道徳性は他律的道徳観から自律的道徳観へと発達することを見いだしている。道徳的判断の発達において最も重要なことは，おそらく児童がいだく他者との相互性への関心であり，自己中心的な認知から他者の立場に立って状況を認知する段階への発達であろう。Piaget が自律的道徳観を協同の道徳観とよぶように，児童が自己と他者との関係を協同的な構えからとらえるようになることが，社会的支援行動を考える場合の基礎となる問題なのである。分配，贈与，援助などの愛他的行動が生起するための認知発達的な基盤としては，従来，以上のようなプロセスが理論的に提唱されてきたのである。

2-2　社会的支援行動の基礎となる規範についての諸研究

一体，社会的支援行動とはさきにもふれたように主として分配，贈与，援助などの愛他的行動をさしている。一般に日常生活における道徳は極めて抽象度の高い一種の社会的規範であるが，個々の愛他的行動は状況に特殊な規範によって遂行されるのが普通である。社会的支援行動の研究者らはその特殊な規範を，贈与規範（giving norm：見返りを期待せずして，贈与自体に価値を認める。たとえば Leeds, R. 1963）と社会的責任規範（social responsibility norm：援助を求めている人には手を貸すべきだ。Berkowitz, L. ら，1963)の2つから考え，これらが愛他的行動を規定する最も重要な規範だという。また，社会的支援行動の特殊な（しかしかなり多くの）ケースとして賠償的な行動があり，これには過去の援助や愛他的行動に対する恩返しや，逆に他者に加えた危害を償う行動などが含まれる。これらの賠償的行動を規定する規範は，互恵規範(reciprocity norm：自分を援助した人には援助をお返しすべきで，傷つけてはならない。Gouldner, A. W. 1960）と補償規範（compensatory norm：自分が危害を加えた相手には当然償うべきである。）であるとされる。

これらのいろいろな規範が児童にどのように学習され，内面化されていくのかの発達的考察についてはまだ充分な資料を欠いているのが現状である。

2–3　分配行動の発達的研究の概観

ここでいう愛他的行動とは異なる観点からおこなわれてきた研究に協同的行動（cooperative behavior）の研究があるが，その諸研究の結果には総じて児童は年齢とともに自己中心的構えから徐々に協同的な構えへと発達することが示されている。たとえば，広田（1951，1961）は競争の発達的研究をおこない，2人のペアに協同作業をするよう教示を与えた結果，4歳児で協同作業をおこなったものは皆無に近かったが，5歳児では3回の教示後に64.7%のものが作業をおこない，6歳児の85.7%は1回の教示で協同作業をおこなうことを見いだしている。しかし広田が考察するように，日常的状況での遊びや相互作用と実験状況でのそれとは児童の認知に影響をおよぼす要因が必ずしも同一とはいえず，種々の実験結果のみで児童の認知発達や相互性への関心の発達を語ることは早計のそしりをまぬがれまい。これと同じことが分配行動の研究にもあてはまるであろう。

分配行動の研究では，通常2人の児童にいくつかの物が与えられ，それを彼らがどのように分けるかが観察される。分けかたは，自分のほうがより多くとる (selfish)，相手と自分に等しく分ける（equal)，自分より相手に多く分ける（generous）の3つで，generous 分配を一般に愛他的分配という。従来の分配行動の発達的研究の主な関心は，これら3つの分配様式の出現を規定する児童の個体的要因を明らかにするとともに，どの年齢でいかなる分配様式が採用されるかの発達的研究にあった。以下，分配行動を中心とした発達的研究を簡単にふり返ってみよう。

2–3–1　年齢と愛他性

Ugurel-Semin, R. (1952) は，4歳から16歳の児童らに2人間の分配をおこなわせた。与えられた分配物は奇数個（5個～15個まで）のナッツである。結果によれば，4・5歳から5・6歳にかけては selfish 分配が圧倒的に多いが，6・7歳から7・8歳では generous が60%前後を占める。そして8歳を過ぎれば equal が generous をうわまわった。selfish は8・9歳以降のいずれの年齢においても10%以下にすぎなかった。したがって，分配様式は加齢とともに selfish→generous→equal と変わってゆき，児童はより平等を求めるようになるというのである。

実験状況はこれと異なるが，Larsen, G. Y. と Kellogg, J. (1974) は4歳から8歳の児童を調査した結果，年齢とともに selfish→equal→selfish→generous というプロセスで分配のおこなわれていく傾向があるという結果を得たのである。

また，Yarrow, M. R. と Waxler, C. Z. ら (1976) は，3歳から7歳の児童を用いて分配・援助・慰めの3行動の観察実験をおこなった。その結果，相手への慰めは年齢とともに増加したが，分配と援助は年齢と相関関係がなかったのである。

以上の結果は分配の愛他性と年齢の間には，年齢が大きくなれば愛他的分配はふえるといった単純な直線的関係の必ずしも成立しないことを示唆する。年齢と愛他性の関係は極めて複雑であり，何か別な仲介的変数の作用することを予想させるものであるが，この点はまだ明確でない。

しかし，加齢につれて分配が selfish→equal→generous と直線的に変化してゆくとする結果は多い。たとえば，さきの Ugurel-Semin (1952) の追試をした Handlon, B. J. と Gross, P. (1959) は，コイン落としゲームで得た賞を2人でどのように分けるかを観察した結果，就学前児童は selfish を多く示すが，その後6年生にいたるまでの児童では相手への分配量が直線的に増加していくことを見いだした。また，Green, F. P. と Schneider, F. W. (1974) は，貧しい子どもらのために作業をする自発性，実験者の落とした鉛筆を拾い上げる行為（援助），与えられた5本の棒キャンディを他の児童に分ける（分配）という3行動間の相関を見ようとした。結果によれば，自発性は年齢と関連しなかったが，援助と分配は年齢と有意に関わり，加齢につれて増加したのである。Dreman, S. B. (1976) も，贈与は年長児ほど多くなることを報告している。

2-3-2 性と愛他性

従来の分配，贈与，あるいは援助を扱った多くの研究では愛他性に性差のあることは認められていない。さきの Ugurel-Semin (1952)，Handlon と Gross (1959)，そして Yarrow と Waxler (1976) などの結果は，愛他性における性差の存在をまったく否定さえしている。しかしながら，成人の愛他的行動を調査した研究では性差はかなり見いだされている（たとえば Darley, J. M. & Latané, B. 1968; Schwartz, S. H & Clausen, G. T. 1970; Latané & Darley 1970; Piliavin, J. A. & Piliavin, I. M. 1972)。Staub, E. (1978) は，成人の愛他的行動における性差はその社会の規範，信念，あるいはステレオタイプにもとづくものであり，男女がそれぞれ異なる性的役割をとることによる行為上の差であるという。社会的規範と性との関係について，

Dreman, S. B. と Greenbaum, C. W. (1973) は，男子（とくに中流階級家庭の男子）は互恵規範に従って愛他的行動をとるが，女子は社会的責任規範にもとづいて愛他的行動をおこなう傾向があるのではないかと推論している。

McGuire, J. M. と Thomas, M. H. (1975) は，女子は社会的責任規範に従順なのに対して，男子は自己の帰結（outcomes）を最大化しようとする競争的関心が高いために，自分と相手との相対的地位の隔差によって援助量を決定しやすいだろうという仮説を立て，ミニチュアボウリングを使った実験をおこなった。実験は，ボウリングの賞として児童が得たチップを他のもらえなかった児童に分け与える量を，競争状況と非競争状況の2条件下で観察したものである。結果によると，チップをもらえなかった児童のスコアが自分より高いとき，男子はその児童に分けようとしなかったが，女子はスコアの高低にかかわらず，一貫して generous 分配をおこなった。つまり，男子は女子にくらべて自他の能力の相対性や状況の競争性により敏感であったのである。

さきの Dreman と Greenbaum (1973) の研究では，愛他性は児童の性，および家庭の社会経済的地位との相互作用によって規定されることが見いだされた。この実験では，誰が贈与をおこなったのかが受け手にわかる条件（donor-known）とわからない条件（donor-anonymous）の2条件下でキャンディ分配が観察された。贈与者が誰かわかっている条件では，おそらく贈与者は受け手からの見返りを期待するだろうが，匿名条件では贈与はまったくのプレゼントとなってしまう。つまり，互恵性に執着する程度を研究者らは確認しようとしたのである。結果を見ると，中流階級家庭の男子は匿名条件より非匿名条件の場合に多くの分配をおこなったが，中流と下流の女子，下流の男子では条件間に有意な差はなかった。Dreman らはこの結果から，金銭に比較的淡白な知的な上流家庭の児童は金銭に執着の強い中流の児童（とくに男子）ほどには互恵性にとらわれないのではないかと分析している。

これら2，3の研究を除けば，分配行動の発達的研究の多くでは分配と性との明らかな結びつきはあまり見いだされていない。

2-3-3 同胞関係と愛他性

Ugurel-Semin (1952) は分配の generosity と同胞数との間に有意な関係を見いだしている。1人っ子は2人・3人兄弟の児童よりも selfish 分配が多いが，2人・3人兄弟の児童は1人っ子にくらべて相対的に equal と generous な分配を示したのである。しかしながら，これを追試した Handlon と Gross (1959) の研究では，1人っ子と兄弟のいる児童との間に何ら分配の差を見いだせなかった。しかもいくつかの年齢群では，1人っ子よりも兄弟のいる児童のほうがより selfish であり，これは Ugurel-Semin の結果と逆であった。また，Midlarsky, E. と Bryan, J. H. (1967) は，贈与と同胞数には何の結びつきも見られなかったと報告している。

同胞数とあわせて，出生順位と愛他性の関係を扱った研究もいくつかある。たとえば，Rosenhan, D. (1969) の研究では，長子と1人っ子は他の児童ほどには進んで人に物を与えようとし

ない傾向があることを見いだしている。逆に，Staub (1970) は援助行動の研究において，末子は長子や他の兄弟にくらべて援助行為の少ないことを発見している。とくに，長子と末子間にはかなりの差 ($p<.05$) が見られたのである。

以上の諸研究にも見られるように，同胞数や出生順位と児童の愛他性との間の関係に一貫した結果は見られないのである。

2-3-4 家庭の社会経済的要因と愛他性

児童の生育環境がその児童の愛他的行動や援助行動などの発現を規定することは充分に考えられる。とくに，ある対象を分配する場合に児童の家庭的背景や社会的環境がその分配のありかたに影響するのではないか。というのは Dreman ら (1973) もいうように，個人の所属する階級や社会経済的地位によって分配時に採用する規範が異なると推論しうるからである。

ところが，Bryan, J. H. (1972) が述べているとおり，愛他的行動と家庭の社会経済的要因の関係を扱った研究は驚くほど少ないのである。しかしその数少ない内の1つである Ugurel-Semin (1952) の研究では，家庭の社会経済的地位を富裕・中流・貧困の3つに分けた場合，貧困群では他にくらべて selfish が最も少なく，富裕群では equal が最少，また generous は貧困群と富裕群で最も多かったが，中流群では最少であったと報告されている。また，さきの Dreman と Greenbaum (1973) は，中流階級の人びとの生活では利益と損失に対する関心が高いために互恵規範が採用されやすいが，下層階級の人びとの同階級内でのうちとけた協同的な交換様式は見返りを要求しない社会的責任規範が採用されやすいだろうと仮定し，既述の結果を見いだしたのである。

しかし，Rosenhan (1969) は家庭の収入と贈与との間に何らの関係も見いだしていない。いずれにせよ，実証的データはあまりにも不足しているが，おそらく1回限りの分配や贈与をおこなわせるだけの実験ではなく，当事者間に相互的な交換の機会が与えられ，互恵性がより顕現化する実験事態でない限り，愛他性と社会経済的要因の結びつきは弱いといえるだろう。

2-3-5 その他の要因について

いままで考察してきた諸要因は主として分配者や援助者の側の個体的要因であった。しかし多くの結果によれば，その時とりあげた要因が必ずしも愛他性とコンシステントな方法で結びついていたわけでもない。とくに分配行動研究においては，分配者だけを分析するのではなく，被分配者との関係性や分配の状況的要因なども含めた体系的な考察が必要と思われる。たとえば Yarrow と Waxler ら (1976) も，どのような条件のもとで児童が攻撃的になったり社会支援的 (prosocially) になるかを研究する必要があるといっている。しかしながら，関係性や状況的要因を含めた体系的な研究は残念ながらほとんど見あたらない。

これらの重要性を示唆する研究としては，Skarin, K. と Moely, B. E. (1974, 1976) の研究

がある。彼らの結果によれば，相手が自分と同性か異性かによって，男女それぞれのおこなう愛他的行動の程度が異なるという。また，Wright, B. A. (1942) は，8歳児は親友よりも他人に対してのほうがより愛他的にふるまうことを見いだしている。これらの結果は分配者と被分配者との関係性が無視できないことを示しているが，Dreman と Greenbaum (1973) はその報告の最後に，被分配者の個体的変数とともに分配物の特徴にも注意すべきであると考察している。

3　分配行動の実験的研究

3-1　研究目的と手続き

従来の分配行動研究の中で最も標準的な手続きを用いているのは，おそらく Ugurel-Semin (1952) の研究であろう。その実験手続きを整理してみると，

(i)　分配物…奇数個のナッツで，ゲームなどをせずに単にプレゼントとして与えられる。

(ii)　分配者（被験児）…4歳から16歳の男女児童。

(iii)　被分配者…分配者と同年齢か年齢差があるのか，また同性か異性か明らかでない。

(iv)　分配状況…分配ペアは並んで座し，実験者が対面してすわる。

まずこの手続き上の問題点を検討し，われわれの研究の参考にしよう。

(1)　分配物…分配行動の愛他性とは，自分にとって非常に魅力的で欲しいものをもう1人の児童に譲るという自己犠牲的行為にある。あまり好きでないものを他者に与えても，愛他的とはよべない。しかし，好きでなくても譲りたくないこともありうる。たとえば，何らかのゲームや作業において支払われた努力や寄与 (inputs) に応じた報酬・帰結 (outcomes) として受けとったものは，各児童に受けとるだけの資格を感じさせるため，容易には他者に譲らないだろう。この手続きを含めた分配行動実験は愛他性を見るよりも，むしろ児童の互恵性への執着の観察を目的とすることになる。したがって，分配物の魅力は自己の努力の結果として経験するよりも，単にその物に対する好みの程度を高めることから始められるべきである。

(2)　分配ペアの構成…Skarin と Moely (1974, 1976) の結果によれば，分配相手が分配者と同性か異性かによっておこなわれる行動は異なるという。同様に，2人の間に年齢差があるときとないときとでも分配が何らかの影響をうけることも充分に考えられる。また，Wright (1942) が見いだしたように，2人の間の親密さの程度によっても分配は左右されよう。日常頻繁に接触する人や親しい人に分配する場合，実験後に損をとり戻したり返礼したりすることがありうるかもしれない。社会的支援行動は本来見返りを期待せぬ行動であるから，親しくもなく日頃接触しない2者間の分配を問題にしたほうが扱いやすいであろう。

(3)　分配の状況的要因…一般に年少児を扱う研究で注意されるのは，児童らが実験室や実験者などに関心を奪われ，日頃の行動を容易には示さないことである。実験室は児童の所属する幼稚園や学校の教室を用いればよいが，実験者効果はむつかしい問題である。分配場面に実験者が同席する場合には，できる限り被験者に不安や緊張を感じさせないように注意しなければならな

い[2)]。

以上の諸点を考慮に入れて実験計画をたてれば，〔分配物獲得に必要な課題の有無〕2×〔分配ペアの性構成（同性・異性)〕2×〔分配ペアの年齢構成（同年齢・年上相手・年下相手)〕3×〔分配ペアの親密さ（高・低)〕2×〔分配場面に実験者が同席・不在〕2，というデザインが必要だろう。この中で今回は従来明らかにされていない「年齢差の効果」を検証するために，分配物はゲームや作業などの課題を通さずに与えられ，分配相手は分配者と同性で未知の関係，実験者は分配場面に同席するという状況を基礎とする。このうえで，分配ペアの年齢構成だけを操作し，分配相手が分配者と同年齢（同年条件)，分配者よりも年上（年上条件)，分配者よりも年下（年下条件）の3条件を設定し，同年条件を統制群として分配ペアの年齢差が分配におよぼす効果を検討することにした。

被分配者の選択も重要な問題である。この実験では被分配者から分配者に話しかけたり，分けかたについて口出しすることを認めない。くわえて，被分配者の個人的な特徴（優しい，うわ手に出やすいなど）によって分配者の意思が左右されることを避けたい。そこで事前に実験実施校へ出かけ，教師らと相談して最も平凡で中立的な児童を被験児とは別の学級からさがし出すことにした。選ばれた児童に対して実験中のふるまいかたを充分に指導し，一般の社会心理学的実験と同様に実験協同者（サクラ）の役割を担わせた。この協同者，つまり被分配者の役を担う児童は，それぞれ被験児10名のパートナーをつとめた（実験の結果，被分配者間に特定の偏りは見られなかった)。なお，幼稚園児については日頃接触の少ない組間で分配ペアを組み，同一児童を被分配者として繰り返し用いることはしなかった。

さて，サンプリングについて何歳の児童を被験者に選ぶべきかが研究目的や実験の成功にとって重要な問題となる。できることなら4歳から12歳ぐらいの年齢を連続的に観察するのが望ましいが，今回はとりあえず3年齢群だけを被験者にすることにした。Ugurel-Semin の結果では，selfish 分配は4歳から6歳に最も多く，generous 分配は6歳から8歳に，そして equal 分配は9歳以降に最も多かった。これとその他 Piaget の理論や諸結果を考慮して，今回は少なくとも，5・6歳（幼稚園年長組)，7・8歳（小学校2年)，10・11歳（小学校5年）の3群を被験者に採用するのが適当と考えた。

さらに，分配物の魅力も重要な要因である。さきに検討したとおり，児童すべてにとって魅力があり，容易に他者に譲ろうとしないものを用いねばならない。そこでわれわれは菓子店や周囲の児童らに5歳から12歳までの児童が非常に好む菓子を尋ね，それにもとづいて好まれる菓子8品目をリストアップし，実験実施校以外の小学校で質問紙調査をおこなった。その結果，2年男子と5年女子には『チュッパチャップス』（棒つきキャンディ)，2年女子には『ベビーラーメ

2) 分配場面の実験者の存在効果について，早川（1972）は，実験者が分配場面に同席しない状況での結果と比較する必要はあるが，『第3者のいるところでの分配の機会は日常生活においても見られるもの……』と考察し，けっして否定的効果のみをもたらすものでないとしている。

ン』，５年男子にはスルメ菓子を分配物として用いることにした。幼稚園児に対しては，幼稚園の教諭と相談し，すべて『チュッパチャップス』を用いた（なお，年上条件では衛生や教育上の配慮から，すべての群を通じて平均選好率の最も高かった『チュッパチャップス』のみにした)。提示する個数は５個，あるいは７個（実験初期のみ）とした。

3-2 研究のための仮説

従来の諸結果を考察し，以下の仮説をたてた。

〔実験Ⅰ：同年条件〕

(1) 年齢と分配

selfish 分配は低年齢児に最も多いと予測しうるが，equal と generous 分配のいずれがより高次の認知発達段階にもとづく分配であるかはさだかではない。５個の菓子を２個ずつ分けた残りの１個を２人のいずれが得ても不公平だと判断されるときの equal 分配は，“自分がとれば体裁が悪いし，かといって相手にも譲りたくない”という equal 分配と同じ equal であっても内容的にはかなりの違いがあろう。したがってその内容を詳細に検討しないで，generous と equal のいずれが一般に高次の分配かを判定することはできないが，Ugurel-Semin の結果の示すところでもあるしここでは一応 equal をより高次の判断による分配様式とみなそう。

仮説１：児童の分配は年齢とともに selfish→generous→equal の方向をたどる傾向がある。

(2) 性と分配

従来，分配が互恵的なやりとりを含まず，しかも分配者と被分配者が同性どうしの場合には，分配の男女差は一貫して見いだされていない。

仮説２：児童の分配行動には，男子と女子の分配に何ら性差は見いだされないだろう。

(3) 同胞関係と分配

依田（1967）らの報告や，Schachter, S.（1959）の出生順位と親和性の研究結果が妥当ならば，愛他性と同胞関係にも何らかの関係が見られるのではないか。

仮説３：同胞数の多い児童ほど generous 分配を示し，末子と中間子にくらべて長子のほうがより generous 分配を示す傾向がある。

〔実験Ⅱ：年齢差のある条件〕

Adams, J. S. (1965) や Walster, E. ら（1976, 1978）の平等理論（equity theory）によれば，各分配者間の資源 (resources) や寄与 (inputs) の差異に対応するよう帰結が分配されるとき，両者の心理的葛藤は最も小さいという[3]。Walster らに従って年齢を個人の inputs と考えるなら

3) Adams, J. S. (1965) らは，２人間の交換関係を各人の資源または寄与とその帰結のやりとりと考え，両者の交換が相対的に平等な場合は［O_A（A の帰結)/I_A（Aの寄与)$=O_B$(Bの帰結)/I_B(Bの寄与)］という等式が成立している。しかし不平等な交換ではこの等号が成立せず，両者は各自の交換率を等しくすべく動機づけられると述べている。

ば，より大きな inputs（＝年齢）をもつ者が小さい inputs しかもたない者よりも多くの分配物を得るとき分配は公平となる。したがって，年下条件では分配者のほうが年齢という inputs を多くもつから，分配者が相手よりも多くの分配物を得る selfish が公平分配となる。逆に年上条件では被分配者のほうが inputs を多くもつため，相手に多く与える generous が公平分配となる。しかし，年少者や年長者に愛他的にふるまうことを奨励する社会的規範があるならば，この平等理論的解釈にもとづく予測と年下条件での規範的行動（年下相手に generous 分配をする）とは一致しない。ただし年上条件では平等理論と規範のいずれに準拠しても generous 分配が予測される。ここでは平等理論的解釈にたって仮説をたててみる。

仮説4：同性で年下の分配相手のいる条件では，同年条件より selfish 分配のふえる傾向がある。

仮説5：相手が同性で年上の分配条件では，同年条件より generous 分配のふえる傾向がある。

仮説6：分配の相手が年下か同年か年上かを比較してみると，年下条件＜同年条件＜年上条件の順に generous 分配が多くなる傾向がある。

なお，実験IIにおいても仮説1，2，3を同じく検証することにする。

3-3　実験方法

3-3-1　被験者

5・6歳は吹田市内私立K幼稚園年長組園児を，7・8歳は吹田市内公立小学校2年生を，10・11歳は吹田市内公立小学校5年生を被験者として採用，その内訳は表1のとおりである。

なお，調査期日は1978年5月—6月，1979年4月—5月であった。

表1．実験条件および年齢別の被験者数

条件 / 性 / 年齢	同年条件		年下条件		年上条件		計
	男	女	男	女	男	女	
5・6歳	21	20	20	20	20	22	123
7・8歳	20	19	18	16	20	22	115
10・11歳	30	21	19	16	22	19	127
計	71	60	57	52	62	63	365

3-3-2　実験の進行および教示

実験の手続きや教示はつぎの順序で進められた。

(1)　控室にて集団状況で絵画や小学生用 YG 性格検査を実施。

(2)　『作業の進み具合いや絵について話したいので，番号をよばれた人は前に出てください』と告げ，実験者（被験児と同性の大学生または大学院生）と被分配者のいる教室へ誘導。

(3)　実験者は入室してきた被験児をすぐに所定の席によびよせ，被験児に，『この人(被分配者)も今まで私といろいろ話していたのだけれど，君と同年齢（または年下・年上）の人です。べつに2人一緒に何かをしてもらうのではありません』。2人に，『きょうは私のところへ来てく

れてありがとう。お礼に菓子を2人にあげよう』と告げ，5個（または7個）の菓子を机の上に置く。

(4)　『これは2人分だから，君が分けてくれる？』と被験児にいう。すぐ後に被分配者の児童に，『君もそれでいいね？』と問い，被分配者に承認させる。

(5)　被分配者に，『君，鉛筆を忘れたの？　待っているからとりに行って』と告げ，外へ出す。

(6)　被分配者が不在時に，『5個（7個）しかないけれど君の好きなように分ければいいから，どう分けたいか聞かせて？』と被験児に問う。

(7)　分配意思を聞き終えれば被分配者を再入室させ，被験児に実際に分配をおこなわせる。（年上条件では(6)のところで分配をおこなわせた）

3-3-3　データの記録，処理方法

おこなわれた分配を selfish, equal, generous の3カテゴリーで記録した。

データの処理については当初χ^2テストを用いていたが（多喜ら, 1978），年下条件と年上条件の反応分布を考慮した場合，通常のχ^2テストや直接確率法によるよりも，3カテゴリーに得点を与えることによって分散分析法を用いるほうが詳細でより信頼性のある分析がおこなえると考えた。得点は分配者と被分配者が得た個数の差にもとづいており，分配物が5個のときには分配者は被分配者よりも5個少ない分配から5個多い分配までおこなえ（－5～＋5），分配物7個のときには7個少ない分配から7個多い分配までがありえる（－7～＋7）。いずれにおいても equal 分配が（＋）と（－）の中点（＝0）に位置する。しかし，分配物が5個用意されたときの得点と7個のときの得点を比較してもいずれがより generous かを解釈しがたく，また90％以上の被験児が相手よりも1個少ないか（generous），2個ずつで差がないか（equal），相手より1個多いか（selfish）のいずれかの分配をおこなっていたため，selfish 分配には－1点，equal 分配には0点，generous 分配には＋1点を与え，各被験児の分配得点から当該群の分配平均値を求めて分散分析法，あるいはtテストによって差の検定をおこなうこととした。

4　実験 I（同年条件）の結果

4-1　年齢と性の効果

5・6歳，7・8歳，10・11歳の児童が自分と同性で同年齢の相手におこなった分配は表2のとおりであった。この分配カテゴリーに得点を与え（generous＝＋1, equal ＝0, selfish＝－1），各群の分配平均値と標準偏差を求めたのが表3である。平均値が－1に近いほど selfish が，＋1に近いほど generous が多いと解釈できる。表3から2要因の分散分析をおこなった結果を表4に示す。

分散分析の結果，年齢間には有意な差を見いだしたが，性差はなく，年齢と性の交互作用も有意でなかった。すなわち，おこなわれた分配は児童の年齢による差だけが大きかったのである（図1，図2）。

表 2. 同年条件の分配結果（数値は人数）

		generous		equal		selfish		計	
5・6歳	男子	7	15	1	4	13	22	21	41
	女子	8		3		9		20	
7・8歳	男子	8	15	8	13	4	11	20	39
	女子	7		5		7		19	
10・11歳	男子	19	35	6	9	5	7	30	51
	女子	16		3		2		21	
全　体	男子	34	65	15	26	22	40	71	131
	女子	31		11		18		60	

表 3. 同年条件の平均値と標準偏差(N=131)

		5・6歳	7・8歳	10・11歳	全　体
男　子	$\bar{X}$	−0.29	0.20	0.47	0.17
	SD	0.93	0.75	0.76	0.87
女　子	$\bar{X}$	−0.05	0.00	0.67	0.22
	SD	0.92	0.86	0.64	0.88
全　体	$\bar{X}$	−0.17	0.10	0.55	0.19
	SD	0.93	0.81	0.72	0.87

表 4. 同年条件の分散分析表（年齢・性）

	SS	df	MS	F
年　齢　(A)	0.56	2	0.28	9.33**
性　(B)	0.01	1	0.01	0.33
A × B	0.06	2	0.03	1.00
誤　差	4.13	125	0.03	

**p<.01

年齢間の差を詳しく求めると，5・6歳と7・8歳には〔t=1.36, df=78, p<.10（片側検定)〕の差で 5・6歳<7・8歳の傾向があり，〔t=2.75, df=88, p<.01〕で 7・8歳<10・11歳が有意，5・6歳<10・11歳もまた有意である(t=4.13, df=90, p<.01)。したがって，各年齢群の平均値の大きさは5・6歳<7・8歳<10・11歳とならび，加齢につれてgenerous分配がふえるといえる。しかし，仮説1(selfish→generous→equal)の関係は，平均値にもとづいても表2の分配カテゴリーにもとづいても認められず，5・6歳でのselfish と 10・11歳での generousの過渡的な位置として 7・8 歳にequal が顕著になっている。よって仮説 1 は支持されず，加齢につれて selfish→equal→generousと分配様式は変化するといえよう。

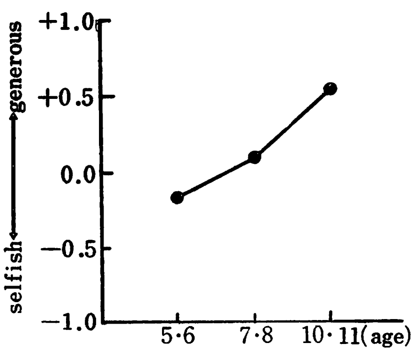

図 1. 分配平均値の年齢間差(男＋女)

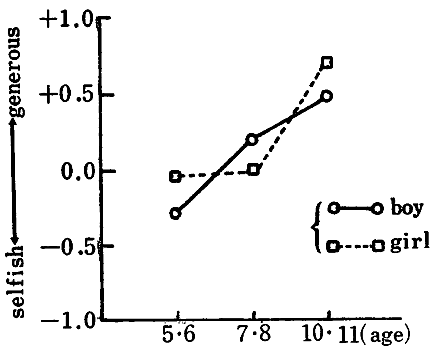

図 2. 年齢×性

分配の性差はないとする仮説2は，表4の分散分析結果によっても，また各年齢での男女差（図2）の t 検定結果にもとづいても，いずれも分配の男女差は有意でなく支持された。

4-2 同胞関係と分配

同年条件の結果を児童の出生順位別に集計し，その平均値と標準偏差を求めると表5となる（1人っ子も順位としては長子であろうが，平均値の差が大きいため切り離した）。

表5を分散分析した結果，出生順位は分配に有意な効果をもつ要因ではなかった（$F=0.38$, $df=3/127$, *not sig.*）。また，平均値の差が最も大きい長子と末子の差も有意ではない（$t=0.96$, $df=101$, $p<.40$）。そこで，出生順位のカテゴリーを初生子（1人っ子＋長子）と次子以下（中間子＋末子）にくくった上で，その差をt検定で求めたがここでも有意差はなかった（$t=0.72$, $df=129$, $p<.50$）。したがって，同年条件では分配と出生順位との間には何ら有意な関係が見られないといえよう。

表5. 出生順位にもとづく平均値・標準偏差(同年条件)

	1人っ子	長子	中間子	末子	全 体
$\overline{X}$	0.15	0.27	0.27	0.10	0.19
SD	0.77	0.88	0.77	0.91	0.87
n	13	52	15	51	131

つぎに，児童の同胞数と分配平均値の関係を見ると（表6），分散分析の結果（$F=0.70$, $df=2/128$, *not sig.*）と，平均値差の最大の2人兄弟と3人以上兄弟間の差（$t=0.55$, $df=117$, *not sig.*）のいずれも有意な値を示さなかった。

以上，児童の出生順位と同胞数のいずれも分配様式と関係がないと考えられ，仮説3は今回の同年条件の結果では支持されない。

表6. 同胞数にもとづく平均値と標準偏差（同年条件）

	1人	2人	3人以上
$\overline{X}$	0.15	0.22	0.12
SD	0.77	0.89	0.88
n	13	85	33

4-3 同年条件の結果の考察

以上のように被験児の性，出生順位，同胞数などの要因はいずれも児童の分配様式を規定するものでなかったが，年齢だけは分配と有意に関係していた。相手よりも自分が多くとる傾向は年齢とともに減少し，年長児では相手に多くを与える generous が増加したのである。さきの表2にあるように，selfish は5・6歳から7・8歳にかけて減少するがそれにつれて generous が増加せずに equal がふえている。Ugurel-Semin (1952) の結果では selfish のつぎに generous →equal と多くなったのに対し，今回は7・8歳で一度増加した equal は10・11歳では generous にとって代わられる。equal は仮説1のところで検討したように，年長児の高次の認知的判断にもとづく分配様式とはいえず，むしろ selfish から generous への過渡的な分けかたなのではないだろうか。

equal 分配をおこなった被験児には，余分の1個を自分も欲しいが相手にもあげねばという葛藤が見られ，equal が顕著であった7・8歳の時期が Piaget のいう他律的道徳観の最終期にあたり，5・6歳ほど自己中心的なふるまいは見せないが，10・11歳ほども自律的判断をおこなえない頃であると考えられる。

ところで，今回の実験では分配相手の不在時に分けかたを問い，2人そろったところで実際に分配させるという実験手続きがとられていた。この手続きは，相手が面前にいなければ自分の思いどおりに分けかたを告げるだろうが，相手がいれば少なからず分けかたを変えるだろうとの予期にもとづいて設定された。ところが，90%以上の児童は一貫した分けかたを示したのである。もちろん，これは分配相手が再度入室することを告げられていたことにもよるのだろうが，別の機会に分配者への反応を変えても generous 分配と答えた児童は generous 分配を変更しようともしなかった例がほとんどで，この手続きは実験状況を繁雑にするだけでほとんど意味がないといえる。つぎの年下条件でも状況は同様であり，年上条件をはじめ以後の分配実験では，被分配者を外へ出してしまってから彼の不在時に分配をおこなわせることにした。ちなみに，equal 分配をおこなった児童は分配相手不在時に分けかたを問われたときにも，自分の前に2個と相手の前に2個置き，残った1個をじっとみつめるだけで，結局は決めかねてあきらめてしまっていた。equal 分配の葛藤の大きさはこのことからもうかがい知ることができる。

今回の同年条件では Ugurel-Semin (1952) の実験手続きに極めて近いが，結果として同一であったのは「分配の男女差はない」ことだけである。年齢は有意な変数であったが，既述のとおり分配様式の変化自体は異なっており，同胞関係は Ugurel-Semin は有意な条件であると考えたが今回の結果では有意な変数でなかった。このように大きく結果がくいちがうことは文化的かつ時代的（1950年初頭と70年後期）な差であるのか結論しがたい。今回と同様の同年条件の実験手続きを用いた研究の反復をまてば，何らかの答えを見つけることができるのではないだろうか。

5　実験 II（年齢差のある条件）

5-1　年下条件の結果

5-1-1　年齢と性の効果

被験児より年下の相手におこなわれた分配様式の年齢と性にもとづく結果は表7に示した。また，表7から同年条件と同じ方法で分配平均値と標準偏差を求めたのが表8である。

表7. 年下条件の分配結果（数値は人数）

		generous		equal		selfish		計	
5・6歳	男子	16	30	1	1	3	9	20	40
	女子	14		0		6		20	
7・8歳	男子	10	17	1	9	7	8	18	34
	女子	7		8		1		16	
10・11歳	男子	16	32	0	0	3	3	19	35
	女子	16		0		0		16	
全　体	男子	42	79	2	10	13	20	57	109
	女子	37		8		7		52	

年齢と性の2要因にもとづく平均値を分散分析で処理した結果，年齢には有意差が見いだされたが，性差はなく，また年齢と性の間に有意な交互作用は認められなかった（表9）。

ついで，各年齢間の差を検定すると，5・6歳と7・8歳には有意差はないが（t=1.38, df=72, p<.20），7・8歳と10・11歳には有意差があり（t=3.34, df=67, p<.01），5・6歳と10・11歳

の間には有意とはいえないまでも差異を示す傾向のあることが認められた（t=1.79, df =73, p<.10)。ここでも同年条件と同じく10・11歳の平均値が最も大きいが，7・8歳は5・6歳と同等かそれ以下の値しか示していない（図3，図4）。

そこで，年下条件の結果について仮説1(selfish→generous→equal)を検討すると，やはりequal は年齢とともに増加せず，それぱかりか，同年条件と同じく10・11歳にgenerous が最多であるが，5・6歳でも同等に generous は多い。つまり，7・8歳が3群中最も低い平均値を示しており，仮説1が支持されないとともに，加齢につれてgenerous 分配がふえるともいえないのである。5・6歳に generous が多いにもかかわらず，7・8歳で減少することは意外な結果である。

表8. 年下条件の平均値と標準偏差

（N=109）

		5・6歳	7・8歳	10・11歳	全　体
男　子	$\bar{X}$	0.65	0.17	0.68	0.51
	SD	0.73	0.96	0.73	0.84
女　子	$\bar{X}$	0.40	0.38	1.00	0.58
	SD	0.92	0.60	1.00	0.71
全　体	$\bar{X}$	0.53	0.26	0.83	0.54
	SD	0.83	0.82	0.56	0.79

表9. 年下条件の分散分析表(年齢・性)

	SS	df	MS	F
年　齢　（A）	0.32	2	0.16	4.00*
性　　　（B）	0.02	1	0.02	0.50
A　×　B	0.09	2	0.05	1.25
誤　　差	4.31	103	0.04	

*p<.05

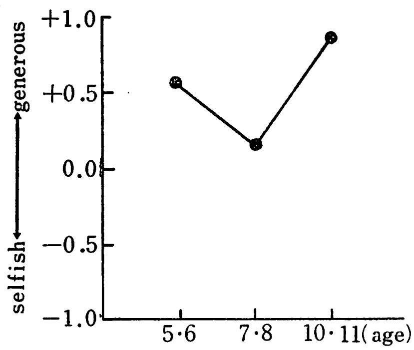

図3. 分配平均値の年齢間差

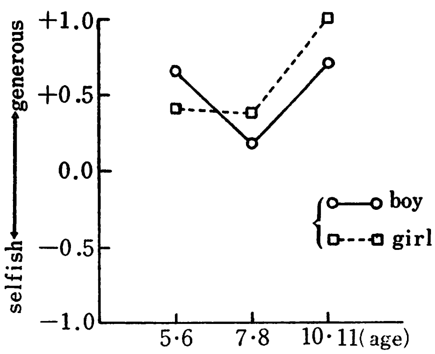

図4. 年齢×性

分配の男女差についてはさきの分散分析の結果はもとより，各年齢での男女差の t 検定値も何ら有意な値ではなかった。したがって分配は男女によって差がなく，仮説2はここで一応支持されたものといえる。

5-1-2　同胞関係と分配

表10は年下条件の分配結果を出生順位ごとに求めた平均値と標準偏差である。その分散分析の結果は有意ではなく（F=0.36, df =3/105, *not sig.*)，平均値差の大きい1人っ子と末子の間にも有意差はなかった（t=0.32, df =59, *not sig.*)。さらに，同年条件と同様に初生子と次子以下との間も有意な差ではなかった（t=0.46, df =107, *not sig.*)。したがって，児童の出生順位と

表10. 出生順位にもとづく平均値と標準偏差（年下条件）

	1人っ子	長子	中間子	末子	全　体
$\bar{X}$	0.33	0.53	0.50	0.58	0.54
SD	0.94	0.80	0.87	0.73	0.79
n	6	40	8	55	109

表11. 同胞数にもとづく平均値・標準偏差（年下条件）

	1人	2人	3人以上
$\bar{X}$	0.33	0.54	0.60
SD	0.94	0.78	0.75
n	6	78	25

分配様式との間には何ら有意な関係がないといえる。

また，同胞数の効果をみるために，1人っ子，2人兄弟，3人以上兄弟の児童それぞれの平均値（表11）を分散分析によって検定した。結果は同年条件と同様で，児童の同胞数は何ら有意な要因ではなかった（$F=0.29$, $df=2/106$, *not sig.*）。

よって，年下条件でも仮説3はまったく支持されなかった（ただし，1人っ子のサンプル数が極端に少なく，補充する必要はあるかもしれない）。

5-2　年上条件の結果[4)]

分配者よりも被分配者のほうが年上のペアでおこなわれた分配の結果は表12のとおりである。

表12. 年上条件の分配結果（数値は人数）

		generous		equal		selfish		計	
5・6歳	男子	9	21	5	11	6	10	20	42
	女子	12		6		4		22	
7・8歳	男子	10	20	6	11	4	11	20	42
	女子	10		5		7		22	
10・11歳	男子	16	33	1	2	5	6	22	41
	女子	17		1		1		19	
全　体	男子	35	74	12	24	15	27	62	125
	女子	39		12		12		63	

この表から年齢と性にもとづいて平均値と標準偏差を求め（表13），2要因の分散分析をおこなった（表14）。

表13. 年上条件の平均値と標準偏差

		5・6歳	7・8歳	10・11歳	全　体
男　子	$\bar{X}$	0.15	0.30	0.50	0.32
	SD	0.85	0.78	0.84	0.84
女　子	$\bar{X}$	0.36	0.14	0.84	0.43
	SD	0.77	0.87	0.49	0.79
全　体	$\bar{X}$	0.26	0.21	0.66	0.38
	SD	0.82	0.83	0.52	0.81

同年条件，年下条件と同じく，年上条件でも性差は有意でなく，年齢だけが分配に有意な効果をもっていた。各年齢間の差は，5・6歳と7・8歳には有意差はないが（$t=0.27$, $df=82$, *not sig.*），10・11歳は7・8歳よりも有意に大きく（$t=2.60$, $df=81$, $p<.02$），また10・11歳は5・6歳よりも有意に大きかった（$t=2.33$, $df=81$, $p<.05$）。したがって，平均値の大きさは，5・6歳と7・8歳よりも10・11歳のほうが大きいという

4）年上条件では，同年・年下条件の結果を考慮し，児童の同胞数と出生順位の分析はおこなわなかった。同胞関係中心のサンプリングを次回にはおこなう予定である。

表14. 年上条件の分散分析表

	SS	df	MS	F
年　齢（A）	0.25	2	0.13	4.33*
性　　（B）	0.03	1	0.03	1.00
A　×　B	0.06	2	0.03	1.00
誤　　差	3.64	119	0.03	

$* p < .05$

結果になる。ここでも仮説1のように年長になるにつれて equal 分配がふえるとはいえず，仮説1は支持されない。しかし，同年条件の結果(selfish→equal→generous)とも異なっており，そうかといって年齢とともに generous がふえるともいいきれない（図5，図6）。

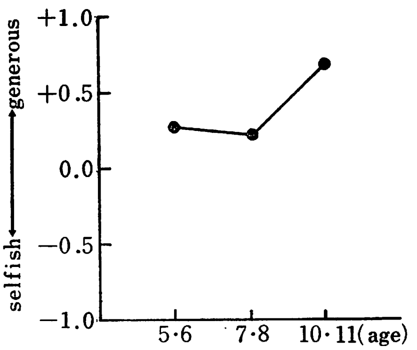

図5. 分配平均値の年齢間差

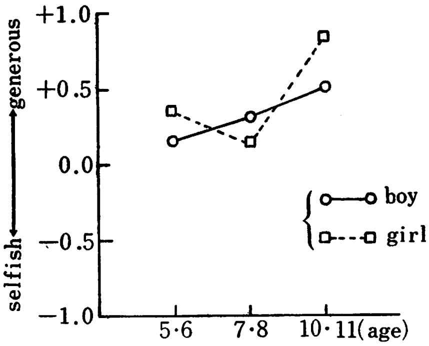

図6. 年　齢×性

図6を見ると男女間に何らかの差があるようにうかがえるが，さきの分散分析の結果（表14）だけでなく，t 検定によって各年齢での男女差を求めても，すべて有意差は見られなかった。よって，仮説2は支持され，分配の男女差はないといえる。

5-3　3条件の結果の比較検討

表15. 3実験条件の分散分析表

(N=365)

	SS	df	MS	F
条　件（A）	0.43	2	0.22	7.33**
性　　（B）	0.04	1	0.04	1.33
年　齢（C）	0.97	2	0.49	16.33**
A　×　B	0.02	2	0.01	0.33
B　×　C	0.09	2	0.05	1.67
C　×　A	0.17	4	0.04	1.33
A×B×C	0.11	4	0.03	1.00
誤　　差	11.36	347	0.03	

$** p < .01$

いままで同年，年下，年上の3条件を個別に見てきた。ここでは3条件の結果を比較分析し，分配者と被分配者間にもうけられた年齢差の効果を明らかにしよう。

まず，各条件の年齢と性別の分配平均値と標準偏差(表3，表8，表13)をもとにして，条件・性・年齢を変動因とする分散分析をおこなった。その結果を表15に示す。

結果によると，同年・年下・年上の3条件間の差は有意に大きく，5・6歳，7・8歳，10・11歳の年齢群の差も有意であった。しかし，性差は有意でなく，3変動因間の交互作用にも有意差は見られなかった。そこで，条件差と年齢群差を明確にし，より具体的に考察をすすめるために，それぞれの平均値を図示してみたのが図7と図8である。

図7によると，年下条件と年上条件のいずれも同年条件より平均値が大きい。各条件間の差は，年下条件は同年条件より有意に大きく（$t=3.21$, $df=238$, $p<.01$），年上条件も同年条件より大きい傾向がある（$t=1.79$, $df=254$, $p<.10$）。しかし，年下条件と年上条件間には有意差はない（$t=1.53$, $df=232$, $p<.20$）。したがって，年下条件では同年条件より selfish 分配がふえるとする仮説4は支持されず，逆に同年条件より generous 分配がふえている。また，年上条件では同年条件より generous がふえたことは仮説5を支持するものであった。3条件の generous の程度は，年下条件と年上条件の2条件が同年条件よりも大きいという結果となった。

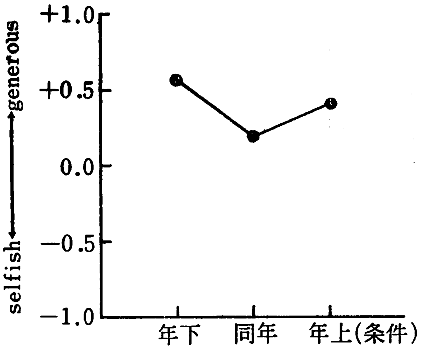

図7．分配平均値の条件間差

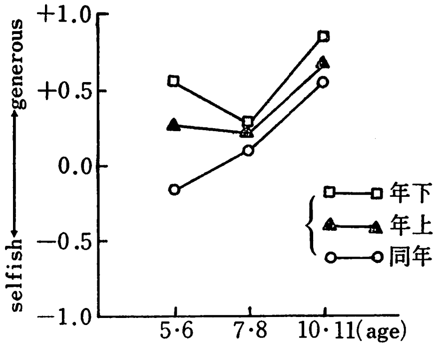

図8．条件×年齢

つぎに，図8で示した各年齢群における条件間の差を検定すると，5・6歳では3条件間の差は有意で（$F=6.84$, $df=2/120$, $p<.01$），年下条件と年上条件間には有意差はないが（$t=1.46$, $df=80$, $p<.20$），同年条件<年下条件（$t=3.52$, $df=79$, $p<.001$），同年条件<年上条件（$t=2.21$, $df=81$, $p<.05$）の2つの関係は統計的に有意である。これは，5・6歳児は分配の相手が自分と同年齢なら selfish な分配を示す傾向が強いが，相手が年上であっても年下であっても generous 分配をおこなう傾向を示すといえる。

これに対して7・8歳では3条件間の差は有意でなかった（$F=0.37$, $df=2/112$, *not sig.*）。各条件の平均値を見ると，7・8歳は同年条件では5・6歳より大きい平均値を示す傾向がある が（$p<.10$），年下条件と年上条件では有意差はないが5・6歳よりも低い平均値しか示していない。5・6歳児が同年齢相手に対して selfish な分配をおこなったにもかかわらず年下や年上の相手には一転して generous に分配したことを考えあわせると，7・8歳児が自分と分配相手との間の年齢差に影響されなかったことに対しては，認知や道徳的判断の発達の観点から考察することが妥当であるように思える。

10・11歳は同年条件でより generous な分配を示していたが，年齢差のある2条件でもさらに generous 分配を増加させている。なかでも，年下相手に対しては同年相手のときよりも一層 generous に分配する傾向があった（$t=1.91$, $df=84$, $p<.10$）。したがって，10・11歳児はいずれの条件でも愛他的にふるまうが，年下の相手には特に generous 分配を多く示すといえよう。

今回の実験でのもう一つの仮説である同胞関係と分配様式との結びつきについては，同年条件

と年下条件において有意な関係は認められなかった。しかし，この2条件間に何らかの交互作用などがあるのではないかと考え，条件と出生順位を変動因とする分散分析をおこなった。その結果，同年条件と年下条件の差は当然ながら有意であったが，出生順位間に有意差はなく（$F=0.28$, $df=3/232$, *not sig.*），条件と出生順位の交互作用にも有意差は見いだせなかった（$F=0.20$, $df=3/232$, *not sig.*）。また条件と同胞数にもとづく分散分析でも，条件間の差を除けば，同胞数（$F=0.31$, $df=2/234$, *not sig.*）のいずれも有意な差を示すものではなかった。さきのところで述べたように，今回のサンプリングが同胞関係にもとづくものでなかったため，安易に結論を下せないだろうが，少なくともわれわれの研究では児童の分配様式と同胞関係（出生順位•同胞数）に明確な関係を発見することはできなかった。

6　結果の全体的考察と討論

従来の分配行動の発達的研究の多くが分配者の個体的要因に焦点をあて，ともすると分配者と被分配者間の関係性や実験状況の分析を見過ごしがちであったことはさきに述べた。われわれの今回の実験は，従来の諸研究の不備を補おうとしたものといえる。

まず，分配者の個体的要因についていえば，児童の性，出生順位，同胞数のいずれも，どの実験条件の分配様式とも何ら有意な結びつきをもたなかったのである。しかし，児童の年齢は3条件のすべてにおいて分配と有意に関連していた。この年齢と分配の関連性は，従来の研究では利己的分配と平等な分配，そして愛他的な分配のいずれがどの年齢と密接に結びついているかという探索的研究に終始していた。本研究の同年条件の実験はこれに相当するもので，年齢につれて selfish→equal→generous と分配様式が移行することを見いだした。今回の第2の発見は年齢と分配とのこの結びつきを安易に一般化しえないことを示唆するもので，分配相手との年齢差の見られる分配状況では必ずしも年少児はより利己的で，年長児が愛他的に分配するとは限らないことが判明した。

さきの結果でも明らかにしたように，5・6歳児が同年条件と年下・年上条件で分配行動に明らかな違いを見せたことを，一体どのように考えたらよいのであろうか。

さらに各年齢の被験者をふやし，詳細な追試を重ねたうえで慎重に検討しなければならぬ問題であり，結論をいそぐべきではないが，今までの結果だけから考えるかぎりつぎのような問題が提起できるだろう。(1)5・6歳児が同年齢相手に selfish 分配を多く示したのはどういう理由からか。(2)年下の分配相手に generous であった理由はより大きな社会的文化的規範の影響によるものなのか，それとも状況的要因によるものなのか。(3)年下に generous 分配をしたことと，年上に generous であったことを同じと考えてよいのだろうか，それとも generous 分配という型をとっているものの，その内容は年下に対する場合と年上の場合とではまったく異なったものなのだろうか。まず(1)の同年条件のパートナーに対して selfish であったことは，この年齢が Piaget（1930）もいうように他律的道徳観の時期であり，一面では極めて利己的，自己中心的であ

るという点からも考えることができる。同年の相手に対して競争的にふるまった結果，分配が，selfish となったと考えることができる。ところが(2)年下の相手に対して generous 分配の多かったことは理解に苦しむ問題である。もし他人に対して親切で寛大であれという外的規範に従って generous 分配をするのなら，同年齢の相手にも generous であってよいはずである。ところが同年には selfish で年下に generous であったという事実は，なにか分配を generous にさせる状況的な規制が作用したと考えることもできる。たとえば，この実験をした幼稚園のある教諭は，いつも年少組の人をいたわるようにくどいほど教えているのでその影響からではないかと示唆してくれた。つまり，他律的道徳観の時期にある5・6歳の児童は，大人からの指示や期待に極めて忠実であるという一面をもっている。年下の者に対して親切であれという外的規 制が5・6歳児の分配を generous にしたと考えることができる。5・6歳児は状況に応じて競争的にふるまうべきか，それとも協同的に行動すべきかを明確にわきまえているといえよう。また別な面から考えれば外国の研究の結果とこのわれわれの5・6歳児の分配の結 果が違うのは，より大きな社会的文化的差異なのかもしれないが，この点には比較研究がなく明確ではない。

ついで(3)の年下への generous 分配と年上への generous 分配は同じであろうか。つまり，5・6歳児は年下の者にはいたわりを，年上の人には敬意をといった認知的分化にもとづいて generous 分配をしていたのであろうか。これも実にむつかしい問題である。おそらくこのような複雑な認知の分化があったわけではなかろう。5・6歳の同年の分配相手は同一幼稚園の他の 組 の児童であったけれど，対面的熟知性が高く，いわば顔なじみであり遠慮なく競争的にふるまえたのであろう。これに対して年下・年上の相手はいわば不馴れな他者とうつり，相手に対する遠慮から generous 分配をしたのではないか。つまり，相手や状況への協同的な調整作用として generous 分配が採用されたのではあるまいか。

10・11歳児は同年齢相手でも generous に分配する傾向があったが，年下相手にはさらに generous を多く示した。10・11歳は Piaget のいう自律的道徳観の時期にあたり，年少者に思いやりや親切さを示すという愛他的規範に追従したと考えるよりはむしろ年少者に親切にすることの意味を具体的に理解したうえでより generous な分配をおこなったと推論できまいか。この推論の妥当性は，分配場面に実験者が同席しない状況での分配を観察し，これと比較してみればおそらく明らかになるのではないか。なぜなら，5・6歳児が規範的行動をとるためには同状況に何らかのポジティブな強化因の存在することが前提となるが，10・11歳児には直接的な外的強化因がその状況に欠如している場合にも規範的行動をとりうるだけの自己強化や自己報酬（self-rewarding）の機構が内面化されているといわれているからである（たとえば，Aronfreed, J. 1968；Rosenhan, D. L. 1972)。この点については，今後，実験者不在場面での分配実験を実施し比較検討を加えたい。

3条件間に分配の有意な差を示さなかった7・8歳児は，他律的道徳観から自 律 的道徳観への過渡期にある。この時期は極端に自分本位でもなく，そうかといって他者志向的でもない行動を

とるといわれるが，Piaget の分配公正判断の発達の考え方に依拠すれば，7・8歳児は分配は絶対的に平等（equal）であるべきだと判断する段階にある。5・6歳児が大人の決定（一種の外的規範）を公正とし，10・11歳児が各自の相対的な平等（equity）を公正と判断するのに対して，7・8歳児では各自の事情のいかんにかかわらず等しく分けることが要求される。今回の実験で7・8歳児が自分と分配相手との年齢差によって影響されなかったこと，および3年齢群中最もequal 分配を多く示したことはこの現われであろう。

総じて同年条件で年齢とともに generous がふえたことは，加齢につれての児童の自己中心性の後退と，社会性の増大にもとづく結果であると解釈できる。

また，年上条件で同年条件より多くの generous が示されたことについては，仮説5で検討したように規範からのアプローチでも平等理論的アプローチでも説明可能である。しかし，年下条件で，とくに10・11歳児が generous 分配を増加させたことは仮説4とは逆の結果であった。仮説4は平等理論の観点からたてたものであり，ここでは平等理論的アプローチから説明してみよう。平等理論からいえば，年長者（分配者）が年下の相手よりも多く分配物をとることは相対的に平等なはずである。10・11歳児は分配公正を相対的平等性によって判断する発達段階にあるが，結果的には分配相手により多くを与える不公平分配をおこなったのである。また，同年条件での generous 分配も分配相手に有利な不公平分配である。このような不公平分配は心理的な葛藤や損失感をひき起こすはずであるが，Walster ら（1978）によれば，愛他的行為とは一般に行為者に損失多く，受け手に報酬多いものであるという。愛他的行為者は，自分よりも少ない inputs をもつ人（たとえば年少者，老人，肢体不自由者など）に対してより多い outcomes を配分することを当然の行為とみなす。したがって，より不自由な他者に親切を施すことこそが最も社会的に公正であると判断される。この愛他的行為は行為者と受け手の間の一回限りの交換率で見る限り，さきに示したように不公平であるが，愛他的行為の遂行者に対してはたとえ受け手からの返礼がなくとも，周囲の人びとや社会からの賞賛という見返りが与えられるため，ともすると心理的な葛藤や損失感は解消されやすいという。このような Walster らの愛他的行為に対する平等理論的説明が適切ならば，われわれのたてた仮説とは異なって10・11歳児が generous 分配を多く示すことは充分にありうることであろう。つまり，分配時に分配相手や実験者からのポジティブな反応を容易に予期しえたこと，そして愛他的行為を遂行すること自体によって得られる心理的な快感情の予期などが，本来，相対的平等性を求めるはずの10・11歳児に非常に generous な分配（愛他的行為）をおこなわせたのであろう。

以上われわれの研究結果の考察は多くの問題を提起することになったが，そのほとんどは年下条件と年上条件という年齢差のある分配条件を設定したことによっている。分配者と被分配者間の年齢差は3–1で示した必要な実験デザインのうちのただ1つにすぎない。今後児童の道徳的判断の発達理論や平等理論などを縦横に駆使しつつ，分配行動に効果をもつ分配者と被分配者間の関係性や分配の状況的要因などを体系的に操作した実験的研究がすすめられる必要がある。また，

今回の同年条件で示された結果と Ugurel-Semin の結果はかなりくい違ったものであった。分配様式が Ugurel-Semin の場合は年齢とともに selfish→generous→equal と変化したのに対して，われわれの結果はむしろ selfish→equal→generous と変化した。これが文化的な差異にもとづくものかどうかを明らかにするためにさらに分配行動の比較文化的な研究も必要なことはいうまでもない。残念ながら従来の分配行動の研究は，主として発達的研究を中心として展開され，規範からのアプローチ，平等理論からのアプローチ，さらには交差文化的アプローチからの研究が極めて不足している状態である。今後これら各アプローチからの総合的研究が必要であろう。

7 要　約

従来の分配行動の発達的研究では，児童の個体的要因と分配様式との間の一貫した関係はまだ見いだされてはいない。これは，分配対象，分配者と被分配者の関係性，さらには分配の状況的要因を充分に考慮していないことに起因するのではないかと思われる。

本研究では，実験者が分配場面に同席する状況において，児童が自分と同性で同年齢の相手におこなう分配（同年条件），同性で年下の相手におこなう分配（年下条件），さらに，同性で年上の相手におこなう分配（年上条件）の3実験条件を組み，分配相手との関係性の1つである年齢差の効果を確認しようとした。年齢差の効果とは別に，同年条件では最も標準的な実験手続きをとった場合の，個体的要因と分配様式の関係を検証することを目的とした。

研究の仮説として以下の6つを設定した。

［仮説］

1. 児童の分配は年齢とともに selfish→generous→equal の方向をたどる傾向がある。
2. 児童の分配行動には，男子女子の分配に何ら性差はない。
3. 同胞数の多い児童ほど generous 分配を示し，末子と中間子にくらべて長子のほうが generous 分配を示す傾向がある。
4. 同性で年下の分配相手のいる条件では，同年条件より selfish 分配のふえる傾向がある。
5. 相手が同性で年上の分配条件では，同年条件より generous 分配のふえる傾向がある。
6. 分配の相手が年下か同年か年上かを比較してみると，年下条件＜同年条件＜年上条件の順に generous 分配が多くなる傾向がある。

被験者は5・6歳，7・8歳，10・11歳の男女計365名で，事前の調査によって魅力の高い分配物が用いられた。分配物は調査参加への礼として分配ペアに奇数個与えられ，おこなわれた分配は，generous（相手に多く与える），equal（1個を残し等しく分けあう），selfish（自分が多くとる）の3様式で記録された。

見いだされた結果は以下のとおりである。

1. 同年条件では，仮説1とは異なり，児童の年齢とともに selfish→equal→generous と分配様式は移行していた（表2，表3，図1）。

2. 同年・年下・年上３条件すべてにおいて，児童の性とおこなわれた分配との間に有意な関係はなかった。仮説２はよって支持された（表3, 図2, 表8, 図4, 表13, 図6, 表15)。
3. 児童の出生順位と同胞数は，同年条件と年下条件において分配に有意な効果をもたず，仮説３は支持されなかった（表5, 表6, 表10, 表11)。
4. 年下条件では，仮説４とは異なり，同年条件より有意に generous 分配が増加した（表7, 表8, 図7)。
5. 年上条件では，同年条件より generous 分配が多くなる傾向があった。よって仮説５は支持された（表12, 表13, 図７)。
6. 年下条件と年上条件の分配結果には有意差はない。したがって，仮説６は支持されず，同年条件<年上条件，同年条件<年下条件の順で３条件の generous 分配がおこなわれていた（図7, 図８)。
7. 同年条件で最も多く selfish 分配を示した５・６歳児は，年下条件と年上条件では有意に generous 分配を増加させたが，７・８歳児は３条件間に分配の有意差を示さず，equal 分配が多かった。10・11歳児はいずれの条件でもより generous な分配を示した（図８)。

参 考 文 献

Adams, J. S. 1965. Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 2. New York : Academic Press, 267–299.

Aronfreed, J. 1968. *Conduct and conscience : the socialization of internalized control over behavior.* New York : Academic Press.

Berkowitz, L., & Daniels, L. 1963. Responsibility and dependency. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 429–436.

Bryan, J. H. 1972. Why children help : a review. *Journal of Social Issues*, 28(3), 87–104.

Darley, J. M., & Latané, B. 1968. Bystander intervention in emergencies : diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **10**, 202–214.

Dreman, S. B. 1976. Sharing behavior in Israeli schoolchildren : cognitive and social learning factors. *Child Development*, **47**, 186–194.

Dreman, S. B., & Greenbaum, C. W. 1973. Altruism or reciprocity : sharing behavior in Israeli kindergarten children. *Child Development*, **44**, 61–68.

Gouldner, A. W. 1960. The norm of reciprocity : a preliminary statement. *American Sociological Review*, **25**, 161–179.

Green, F. P., & Schneider, F. W. 1974. Age differences in the behavior of boys on 3 measures of altruism. *Child Development*, **45**, 248–251.

Handlon, B. J., & Gross, P. 1959. The development of sharing behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 425–428.

早川紹代　1972. 幼児の分配行動における不公平経験の効果. 教育心理学研究, **20**(３), 26—33.

広田君美　1951. 競争の実験社会心理学的研究. 心理学研究, **21**, 70—79.

広田君美　1961. 協同の心理(１). 児童心理, 東京：金子書房, **15**(５), 104—124.

広田君美　1961. 協同の心理(２). 児童心理, 東京：金子書房, **15**(６), 100—122.

Kohlberg, L. 1969. Stage and sequence : the cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research.* Chicago : Rand NcNally, 347–480.

Larsen, G. Y., & Kellogg, J. 1974. A developmental study of the relation between conservation and sharing behavior. *Child Development*, **45**, 849–851.

Latané, B., & Darley, J. M. 1970. *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?*. New York : Appleton-Crofts. 竹村研一・杉崎和子（訳）1977. 冷淡な傍観者：思いやりの社会心理学. 東京：ブレーン出版.

Leeds, R. 1963. Altruism and the norm of giving. *Merrill-Palmer Quarterly*, **9**, 229–240.

McGuire, J. M., & Thomas, M. H. 1975. Effects of sex, competence, and competition on sharing behavior in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 490–494.

Midlarsky, E., & Bryan, J. H. 1967. Traning charity in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 408–415.

Piaget, J. 1930. *Le jugement moral chez l'enfant.* Geneve : Institvt J-J. Rousseau. 大伴茂（訳）1956. ピアジェ臨床児童心理学・Ⅲ児童道徳判断の発達. 東京：同文書院.

Piliavin, J. A., & Piliavin, I. M. 1972. Effects of blood on reactions to a victim. *Journal of Personality and Social Psychology*, **23**, 353–362.

Rosenhan, D. L. 1969. Studies in altruistic behavior : developmental and naturalistic variables associated with charitability. *Paper presented at the meetings of the Society for Research in Child Development.*

Rosenhan, D. L. 1972. Learning theory and prosocial behavior. *Journal of Social Issues*, **28**(3), 151–163.

Schachter, S. 1959. *The psychology of affiliation.* Stanford, California : Stanford University Press.

Schwartz, S. H., & Clausen, G. T. 1970. Responsibility, norms and helping in an emergency. *Journal of Personality and Social Psychology,* **16**, 299–310.

Skarin, K., & Moely, B. E. 1974. *Sex differences in competition-cooperation behavior of eight-year-old children.* New Orleans : Tulane University.

Skarin, K., & Moely, B. E. 1976. Altruistic behavior : an analysis of age and sex differences. *Child Development*, **47**, 1159–1165.

Staub, E. 1970. A child in distress : the influence of age and number of witnesses on children's attempts to help. *Journal of Personality and Social Psychology,* **14**, 130–140.

Staub, E. 1978. *Positive social behavior and morality: social and personal influences*, vol. 1. New York : Academic Press.

多喜弘次・高木修・広田君美　1978. Sharing behavior における児童の愛他性. 日本社会心理学会第19回大会発表論文集, 134—135.

多喜弘次・広田君美　1979 a. Sharing behavior における児童の愛他性(２). 日本社会心理学会第20回大会発表論文集, 94—95.

多喜弘次・広田君美　1979 b. Sharing behavior における児童の愛他性(３)：分配におよぼす年齢差の効果. 日本心理学会第43回大会発表論文集, 753.

Ugurel-Semin, R. 1952. Moral behavior and moral judgment of children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 463–474.

Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1976. New directions in equity research. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 2. New York : Academic Press, 267–299.

Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978. *Equity: theory and research.* Boston : Allyn and Bacon.

Wright, B. A. 1942. Altruism in children and perceived conduct of others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 37, 218–233.

Yarrow, M. R., & Waxler, C. Z. (*et. al.*) 1976. Dimensions and correlates of prosocial behavior in young children. *Child Development*, 47, 118–125.

依田　明　1967. ひとりっ子，すえっ子．東京：大日本図書.